

小学校における書写指導の考察

—望ましい姿勢や筆記具の持ち方に着目して—

A Study of *SHOSHA* Education in Elementary School —Focusing on the Posture and the Gripping Style of Writing Implements—

枝元 香菜子
Kanao EDAMOTO

Keywords : *shosha* education, elementary school, textbook, the courses of study
キーワード : 書写教育、小学校、教科書、学習指導要領

1. はじめに

2006年に改正された教育基本法には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」(第2条第5項)と定められている¹⁾。このことにより、伝統文化の継承と発展を支える教育の充実がより一層重視する方向が示された。

この方向を受け、小学校における国語教育では、伝統文化の有用な学習としての書写指導が重要視されるようになった。本論考は、小学校教員養成を主目的とする学科の教員としての立場から、書写指導の在り方を考察した。

近年、パソコンやスマートフォン、タブレット端末等の電子機器類の普及により、「手で文字を書く」機会が減少傾向にある。大学等のレポート課題においても、ほとんどがパソコンでの作成が当たり前で、手書きを課せられることはほとんどない。また、コピー機や印刷機が充実やICレコーダー、ビデオカメラ、デジタルカメラなどの記憶端末機器の発展によって、必要な情報を文字で記録することも少なくなってきた。毎年実施されている「国語に関する世論調査」²⁾では、「読めるが書けない」「字が雑で読みにくい」「点画が出来ていない、筆順がわからない」「字が読めればよい」等という実態がますます加速されることが危惧されている。

一方で、「きれいな字」に対する意識を持つ人も増えてきているように思う。最近では、「ボールペン字講座」、「書道講座」などの通信教育の宣伝や、「美文字練習帳」、「大人のペン字練習帳」など多数の雑誌を目にするようになった。また、テレビでも「美文字」を取り上げた番組が放送されたりしている。このように、大人になって改めて学び始める人が増えたり、「美

文字」が社会の中で取り上げられたりすることを考えると、学校教育での「書写・書道」の学習が必ずしも定着しておらず、まだまだ日常生活との結びつきや生涯にわたって親しむことへの繋がりに課題がある可能性が考えられる。

これらに加えて、書写の指導者としては、筆記具の持ち方や書く時の姿勢についても問題点は発見できる。実際に小学校や中学校で子どもたちの筆記具の持ち方を観察してみると、正しいもち方をしている児童・生徒は少ないように思う。これは子どもたちだけでなく、大学生や社会人においても同様であるのではないだろうか。木戸ら（2012）³⁾は、短大学生に対して「望ましい持ち方」を検証した結果、クラスの3分の1程度しか該当しなかったと報告している。本論考が対象とする、小学校の児童においても同じような現象が見られたと述べている。筆記具の持ち方や書く時の姿勢については、書くことにおける基本中の基本であり、国語や書写のみならず全ての学習で大切になってくると考えられる。

ゆえに、学校教育で行われる書写について見つめなおし、日常生活や生涯へのつながるような書写教育の指導のあり方について再検討していく必要がある。本稿では、小学校書写を取り上げ、特に書写の根幹となる「姿勢」や「筆記具の持ち方」について教科書分析をしながら考察していくこととする。

2. 先行研究

書写に関する先行研究は、書写の意義、カリキュラムについて検証したものが多くみられる。玉澤ら（1991）⁴⁾や林（2011）⁵⁾は、大学生を対象に書写に対する意識調査を行い、書写書道教育の課題や小学校における書写のあり方について考察している。また、杉崎（2013）²⁾は、国語および書写における書く学習についての授業評価を行いその意義と可能性について言及している。

今回焦点を当てている筆記具の持ち方など書写の基本的な部分に関する研究に関しては、持ち方が疲労・点画の書きやすさ、視線・書字速度・字形に影響を及ぼすことを久米（1989）⁷⁾が報告している。また、押木（2002）⁸⁾は、旧来からの典型的な持ち方を「望ましい持ち方」とした上で、望ましい持ち方の根拠や合理性について言及している。木戸（2012）³⁾はこの「望ましい持ち方」を用いて学習指導要領や教科書での扱いについてまとめ、大学生を対象とした実態調査を行っている。杓名ら（2013）⁹⁾は、ホリスティックでバリアフリーな教育の視点から書写における姿勢と持ち方について調査をし、横書き書字ではこれまで教科書の中で扱われていた縦書き時の学習法と異なる姿勢と執筆方法が求められることを述べている。しかし、現行の教科書についての記載や指導法について詳細に取り上げているものはあまりみられない。そこで本稿では、書写の基礎となる「姿勢」や「筆記具の持ち方」の双方の記載について数社の教科書を分析するとともに、その指導法について考察していくこととする。

3. 書写とは

3.1 書写と書道

学校教育における書写教育について述べる前に、まず書写と書道について整理しておく。わかりやすくまとめると、書写は「国語科」で文字を正しく書く教科、書道は「芸術科」で文字に芸術性を持たせて書く教科であると言われている¹⁰⁾。しかし、書写は国語、書道は芸術というように異なる別のものとして考えるのではなく、一括りとして捉えろといった主張が多数みられる。加藤（2016）¹¹⁾は、高等学校芸術科書道において時々見受けられる「書道は芸術であり、個の表現です。これまでの書写の学習とは異なります」という指導に大きな課題があることを指摘している。そして、中学校までの国語科書写の学習の発展性の上に芸術科書道の学習があることを理解させる指導が必要であると述べている。つまり、小学校・中学校での書写から高等学校への書道へ、いかに円滑に接続するかということが求められているのだ。また、荒井（2007）¹²⁾は、「書写」と「書道」の連続性や「書写」から「書道」への導入指導の大切さは周知のことであり、「書写」・「書道」をそれぞれの児童生徒が学ぶことの根は一つであると考えられると述べている。そして、「書写」の上に「書道」の要素を加え、豊かにし、肥やしにしていく向きに考えるべきではないかとの主張もしている。図1に、「文字教育」の視点から説明した国語の一分野について示す。ここでも小中から高校への学習連携が示されており、小中での書写が基盤となってくることが読み取れる。

押木（2003）¹³⁾は、国語科教育における「書写」では、文字の正しさ、読みやすさ、書きやすさ、速さ等が求められるとしている。さらに、書写の学習内容は、読みやすい文字を書きやすく実現するためにあり、その内容は次の①～⑨に分類できると述べている。

- ①姿勢・筆記具の持ち方 ②用具・用材とその扱い方
- ③基本点画と筆記具の動き ④筆順 ⑤字形 ⑥書く速さ
- ⑦配列・配置 ⑧書写の形式 ⑨良否・適否の弁別（鑑賞）

3.2 小学校での書写の取り扱い

現行の小学校学習指導要領国語「第3指導計画の作成と内容の取扱い」では、書写に関して「硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするととも

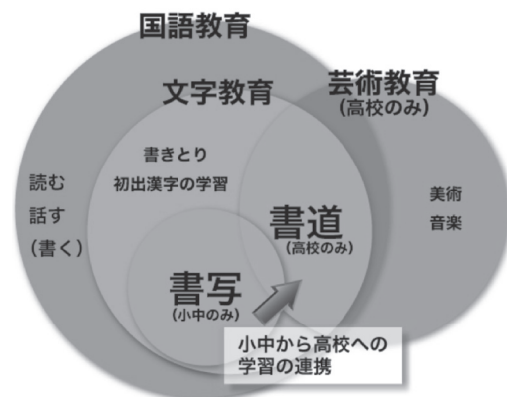


図1 「文字教育」の視点から説明した国語の一分野

に、各学年30単位時間程度を配当すること。」¹⁴⁾と記載されている。書写に関する事項は、「文字に関する事項」の指導や、「B書くこと」の領域の指導と緊密に関連する¹⁵⁾と言われており、学年に応じた系統的な指導が行われている。

低中学年では、文字を書く基礎となる「姿勢」や「筆記具の持ち方」、「点画や一文字の書き方」、「筆順」の事項を学習し、徐々に「文字の集まり（文字群）の書き方」、「目的に応じた書き方」への発展していく。現行の学習指導要領への改訂にあたり、書写の指導においては、「実際の日常生活や学習活動に役立つよう、内容や指導のあり方の改善を図っている。」¹⁶⁾と明記されたことから、系統的な学習を通じて日常生活等に生かすことのできる書写の能力を育成するための授業づくりが行われている。

本論考で焦点を当てている「姿勢」や「筆記具の持ち方」については、第1学年および第2学年の書写に関する事項の中で、「ア姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。」¹⁷⁾と記されている。解説の中では具体的に、「[姿勢や筆記具の持ち方を正しくし]とは読みやすく整った文字を効率よく書くために必要なことを示したものである。正しい姿勢になるには、背筋を伸ばした状態で体を安定させたり、書く位置と目の距離を適度にとったり、筆記具を持ったときに筆先が見えるようにすることが重要である。「筆記具」は、低学年では、鉛筆やフェルトペンを使用する。「持ち方を正しく」するためには、人差し指と親指と中指の位置、手首の状態と鉛筆の軸の角度などを適切にする必要がある。」¹⁷⁾と述べられている。さらに、「姿勢と筆記具の持ち方は、深く関連している。」¹⁷⁾とも言われており、双方の重要性とともに、関連性を考えて始動をすることの大切さが語られている。

4. 望ましい持ち方・正しい姿勢

押木ら（2003）⁸⁾は、「正しい持ち方」という表現に対して、「正しい持ち方でなくても書けるのになぜいけないのかといった反発を招きかねない」として、「望ましい持ち方」という表現を用いている。そして、この「望ましい持ち方」の条件として以下の条件が挙げられている⁸⁾。

- 「筆記具に接する指の位置」：親指＝第一関節より先の中央部、人差し指＝第一関節より先の中央部＋第3関節から第2関節の間、中指＝第一関節下の側面
- 「机に接する指の形状」：中指／薬指／小指をそろえた状態で軽くまるめ、小指が机に接する。
- 「指が接する筆記具の位置」：人差し指＝筆記具の先端部（鉛筆の場合、削り際のやや上）、親指＝人差し指より先端部から離れた位置
- 「角度」：前方から見て20度程度、側方から見て60度程度

姿勢に関しては、小竹（2002）¹⁸⁾は、「正しい姿勢」とは、微細な精神運動の結果、手指

と視覚を関連させながら行われる書字・書写行為の機能性を確保し、効率化を実現するものでなければならない。そのため、前段階の身体の構え方は、手指や視覚の活動を阻害しないものであることが求められる」とし、「背筋をのばす」ことや「足を引き気味にして、足の親指に重心をかけるようにして構える」ことの重要性を述べている。

5. 書写教科書の分析

書写指導において、教科書は重要な意味をもつ。書写の教科書は、図・絵・写真が多用されており、児童はその教科書をモデルとして書写の学習に取り組みこととなる。よって、ここでは、書写児童の重要な意味をもつ教科書を、書写の根幹として挙げられる「正しい姿勢」、「筆記具（低学年：鉛筆、3年生以上：筆）の使い方」の2つの視点から教科書分析を行った。本論考においては、多くの小学校で使用されているA～D4出版社の教科書（1～3学年）を対象に、表現内容および表現方法を抽出した。

5.1 硬筆における正しい姿勢と望ましい鉛筆の持ち方

硬筆を使用する書写の指導は各学年で行われるが、姿勢や鉛筆の持ち方については主に第1学年および第2学年で行われている。小学校学習指導要領国語科の第1学年および第2学年の書写に関する事項においては、「姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。」と記されている。教科書では、すべての出版社で付録を除いた先頭ページに姿勢や鉛筆の持ち方について記載されていた。このことから、書写を学習するにあたり、姿勢や鉛筆の持ち方は基本中の基本であり、学習のはじめにしっかりと指導することが大事であることが分かる。表1に出版社ごとに「姿勢」および「鉛筆の持ち方」について抽出した内容を示した。

姿勢についてはA～D社すべての教科書で、座り方（背中を伸ばす、お腹と背中に拳一つ分空ける）や足の置き方（足裏を床につける、足を開く）、手の置き方が、写真やイラストを交えながら説明されていた。正しい姿勢の合言葉「足はべったん、せなかはびん、おなかとせなかにぐう一つ、紙をおさえてさあ書こう（C社）」については文言の差異は多少あるものの、すべての教科書に記載されていた。特徴的な事項として、B社の教科書では「書いているところを見る。」と視線についても説明がされていたことが挙げられる。また、A～C社の教科書では1・2年生共通して写真を交えながらほとんど同じ説明が記されているのに対し、D社の教科書はイラストを使用しており、2年生では説明書きがあるものの1年生ではイラストのみ掲載であった。これに対する出版社の意図は分からないが、もしかしたら気づきや発見を大切にしたいという想いがあるのかもしれない。いずれにせよ、指導者がきちんと正しい姿勢を教えることが重要である

鉛筆の持ち方についても、姿勢同様、写真やイラストを交えながら鉛筆の持つ位置や指の添

表1 低学年書写の教科書における姿勢および鉛筆の持ち方の記載内容

出版社	学年	姿勢		合言葉	鉛筆の持ち方	
		写真	説明		写真	説明
A社	1年	写真	せなかをのばす。	足は、ぺたぺた。 せなかは、ぴん。 おなかとせなかに、ぐう一つ。 えんぴつをもって、そっと手をおく。	イラスト	親ゆびと人さしゆびでかくつまむ。 のこりのゆびをそろえる。 ここをあける。 ゆびに力を入れすぎない。 えんぴつのけずってあるところが見えるようにもつ。
	2年	真横 正面 真上	いすとせなかの間に少しあける。 つくえとおなかの間に少しあける。 足のうらをびったりゆかにつける。 足をすこしひらく。 紙をかろくおさえる。			
B社	1年	写真	1せなかをのばす。	足は、ぺたぺた。 せすじは、ぴん。 おなかとせなかに、ぐうひとつ。 紙をおさええてさあ書こう。	写真	1親ゆびの先が人さし指の先より上になる。 2えんぴつがここにつかないように。(1年のみ) 3へこませない。 ※まっすぐすぐわってえんぴつの先が見えるかな。
	2年	真横 正面	2少しはなす 3ひじはつくえの上のせない。 4おなかとつくえの間は、少しはなす。 5かろく紙をおさえる。 6足を少しひらく。 ※書いているところを見る。			
C社	1年	写真	せなかをまっすぐにする。	足はぺたたん せなかはぴん おなかとせなかにぐう一つ 紙をおさええて さあ書こう	写真	空ける やさしくもつ。ぎゅっとにぎらない。
	2年	真横 正面 真上	少し空ける。(※お腹と背中) 足のうらをゆかにつける。 少し空ける。(※足の間)			
D社	1年	イラスト	イラストのみ (※字を書く姿勢・手の置き方)	①おなかとせなかにぐう一つ。 ②あしはべたべた。 ③せなかをぴん。	写真	えんぴつつまんで もち上げて すうっとたおして中ゆびまくら きちんとじょうずにもてたかな はしのもち方にている。 写真のみ(※指の位置)
	2年	イラスト	せなかをのばす。 少しあける。 少しあける。 足を少しひらく。 イラストのみ(※手の置き方)			

*: 加筆事項

え方が具体的に説明されている。A～C社の教科書では、「ゆびに力を入れすぎない (A)」、「へこませない (B)」、「やさしくもつ。ぎゅっとにぎらない」のように持つときの力の入れ方についても記載されている。また、A社とC社では、はしのもち方に似ているという図解や真下（鉛筆の芯側）からみたときの指の位置についての写真も載っていた。一方、D社は1学年、2学年ともにイラストのみの掲載であり、説明書きはなくイラストと見比べて確認するようになっていた。

(文部科学省検定教科書¹⁹⁾を参考に著者まとめ)

5.1 毛筆における正しい姿勢と望ましい筆の持ち方

毛筆の学習は第3学年から始まる。小学校学習指導要領国語科の第3学年の書写に関する事項においては、「点画の種類を理解するとともに毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。」と記されている。筆圧に注意して書くためには、姿勢や正しい筆の持ち方が極めて大切になってくる。表2に第3学年の毛筆学習を行うにあたっての「正しい姿勢」および「筆の持ち方」について抽出した内容を出版社ごとに示した。

姿勢については、すべての教科書で座り方（背中を伸ばす、お腹と背中に拳一つ分空ける）や足の置き方（足裏を床につける、足を開く）、肘の注意事項、紙を軽く押さえることについて写真やイラストを交えながら説明されていた。肘の注意事項に関しては、A社、B社、D社で「肘を上げる」と書かれているのに対し、C社では「肘を上げすぎない」と記載されていた。また、D社では、「頭を少し前にかたむける」という説明や真上からのイラストが他と異なる点であった。

筆の持ち方では、「二本がけ」、「一本がけ」の2種類の持ち方について写真やイラストを交えながら説明されていた。内容については4社ともほぼ同じであった。それ以外にA～C社では、肘の高さや筆のじくの傾きについての記載もあった。毛筆は第3学年で初めて学ぶということもあり、どの教科書もしっかりと取り上げられていた。

(文部科学省検定教科書²⁰⁾を参考に著者まとめ)

5.1 先頭ページ以外における姿勢や持ち方に関する記載事項

上記には、各教科書の先頭ページにおける姿勢や持ち方に関する事項について述べたが、ここでは先頭ページ以外の学習の中で、姿勢や持ち方についてどのような表記や確認がされているかを抽出した。

1・2年の教科書すべてで、フェルトペンの持ち方が写真もしくはイラストで示されていた。B社、C社、D社の教科書では、鉛筆の持ち方と同じであることが記載されていた。また、B社とD社では、1年生の始めに正しい姿勢や鉛筆の持ち方を学習した後、いろいろな線を実際にかくところのチェック事項として「しせいとえんぴつのもちかたはいいかな (B社)」、「しせいとえんぴつのもちかたに気をつけてかきましたか (D社)」が挙げられていた。2年生で

表2 小学校第3学年書写の教科書における姿勢および筆の持ち方方の記載内容

出版社	学年	姿勢（毛筆）		筆の持ち方	
		図	説明	図	説明
A社	3年	写真 真横	せなかをのばす。 こぶし一つ分くらいあける。 ひじを上げる。 紙を軽くおさえる。 足のうらをゆかにつけて、少し開く。	イラスト	◆二本がけ すき間をあける。 親指と、人さし指で持つ。 薬指でささえ、小指をそえる。 ◆一本がけ すき間をあける。 親指と、人さし指で持つ。 中指でささえ、薬指・小指をそえる。
B社	3年	写真 真横 正面	1 せすじをのばす。 2 少しはなす 3 足は少し開き、ゆかに足のうら全体をつける。 4 ひじは上げすぎないようにする。 5 軽く紙をおさえる。	写真	◆二本がけ 親指と人さし指で持つ。 薬指でささえ、小指をそえる。 ◆一本がけ 親指と人さし指で持つ。 中指でささえ、薬指・小指をそえる。
C社	3年	写真 真横 正面	せなかをまっすぐにする。 にぎりこぶし一つ分空ける。 真下に下ろす。（*足の置き場） 足のうらをゆかにつける。 少しあける。（*足の間） 紙を軽くおさえる。 ひじを上げる。 ※筆を持つ手のひじの高さが違う。	写真	◆二本がけ 親指は真横に向ける。 人さし指と中指をかける。 指が二本入るくらいすき間を空ける。 薬指でささえ、小指をそえる。 ◆一本がけ 親指は真横に向ける。 人さし指をかける。 中指でささえ、薬指と小指をそえる。
D社	3年	イラスト 斜前 真上	せなかをのばす。 おなかとつくえの間、せなかといたすの間は、こぶし一つ分くらいあける。 足を少し開き、足のうらをしっかりとゆかにつける。 頭を少し前にかたむける。 ひじを上げる。 半紙を軽くおさえる。	写真	◆じくのかたむき 筆は、鉛筆よりも立てて持つ。 ◆二本がけ 親指と人さし指・中指で持つ。 薬指でささえ、小指をそえる。 ◆一本がけ 親指と人さし指で持つ。 中指でささえ、薬指・小指をそえる。

*：加筆事項

は、姿勢や持ち方の復習をした後に、「姿勢と鉛筆の持ち方に気をつけてかきましょう」といった課題が設定されていた。さらにC社では、かきぞめのページの気をつけることで「正しいしせいと、えんぴつのもちかた」が示されていた。

3年の教科書では、4社すべてで小筆の使い方および書きぞめの姿勢（立って書く場合、ゆかて書く場合）が写真もしくはイラストで示されていた。小筆については、鉛筆よりも立てて持つことが共通で記載されていた。

以上のように新たな筆記具が出てきたときや書きぞめでは、教科書の中で姿勢や持ち方の復習事項が記載されているが、基本的には新たな学習（字形や筆順、大きさ、バランス）が中心となっていた。

（文部科学省検定教科書^{19,20}）を参考に著者まとめ）

6. 教科書分析からみた現状と今後の課題

今回、分析に用いた教科書すべてで、書写の基本となる姿勢や筆記具の持ち方に関しては冒頭のページに記載されていた。これについては、分析対象としていない他の学年や中学校書写の教科書においても同様であり、いかに姿勢や筆記具の持ち方が重要であるかということが推察できる。木戸（2012）³¹の研究の中で、筆記具の持ち方に関しては、小学いる子どもの全身写真が載っていると報告されている。これらのことから書写指導では、つつい文字の形状、キレイさ、バランスなどに目が行きがちであるが、その前提として望ましい姿勢や持ち方指導は極めて重要であると考えられる。

今回の教科書分析では、どの出版社においても、望ましい姿勢や筆記具の持ち方について写真やイラストを交えながら説明されていることが改めて明らかとなった。押木らの「望ましい持ち方」に準ずる説明についても、子どもたちにも分かりやすく示されていた。A社とC社では、はしの持ち方に似ているという図解を取り入れており、日常生活と結びつけようとしている工夫が感じられる。一方で、小学校低学年の児童が、どの程度はしの正しい持ち方を理解できているのかについて疑問が残るところでもある。また、一人一人の感覚が異なるため、筆記具を持つ際の力加減について教えるのは難しいことではあると考えられるが、「やさしくもつ」、「ぎゅっとにぎらない」、「（人差し指を）へこませない」など出版社ごとに表現の工夫が見られた。ただ、児童一人ひとりによって言葉の捉え方や感じ方は異なることを考慮すると、教科書に示された1種類の説明だけでなく、指導者が様々な表現を用いることで伝えていくことが必要であることを指摘したい。これに加えて、小学校1年生の段階でも筆記具の持ち方に差があり、きちんと家庭や幼稚園・保育園で教育されている児童もいれば、クレヨン等をグーで握っているような児童もいることも考慮しなくてはならない。すでに入学してきた時点で自分なりの持ち方、いわゆる望ましくない持ち方が定着してしまった児童に対して、どう指導をしていくかが課題となるだろう。さらに、毛筆時の姿勢に関する表現では、3社が「肘をあげる」と説明していたのに対し、1社は「肘を上げすぎない」という説明方法であった。何を強

調したいのかによって変わってくると考えられるが、これについても児童の実態に合わせて適切な表現を見極めていくことが求められる。

本稿の「はじめに」でも述べたが、小学校6年間、中学校3年間の計9年間、書写教育が行われているにも関わらず、現状としては望ましい姿勢や筆記具の持ち方が身についていないことが課題として挙げられる。教科書にはお手本となる写真やイラストは掲載されているが、望ましくない持ち方や姿勢に関しての図解はほとんど見られない。字形やバランス、とめ・はね・はらいなどに関しては様々なところで正しいものとそうでないものが対比されている。姿勢や筆記具の持ち方に関しては、押木らのいう「正しい持ち方でなくても書けるのになぜいけないのか」といった反発を招きかねない」というようなことと関連して、望ましいとされるお手本のみが掲載されている可能性もあるが、書写を指導していく上での基礎となる部分でも、字形やバランス同様な対比があるとわかりやすいのではないかと思う。

木戸（2012）³⁾は、大学生の実態調査の中で、①人差し指と中指の位置は正しいが、親指が人差し指にかかってしまう、②毛筆の太筆を持つときのように人差し指と中指の2本が鉛筆の上にかかり、薬指の上に載っている形、③人差し指・中指が②のようになり、さらに親指が人差し指にかかる形、④親指が人差し指の下に潜り込んでいる場合など望ましい持ち方とは異なるパターンを挙げている。指導者は、実際にこれらのことについても指導をしていく必要があると考えられる。

今後の課題として以下の3点を記しておきたい。

第一は、学習初期の段階での指導の重視である。学習初期の段階できちんと指導をしておかないと、学年があがるにつれて、望ましくない持ち方が定着してしまい、なかなか直せない恐れもある。指導者は、字を丁寧に美しく書くためにも、また、筆圧や筆の運び、疲労、点画の書きやすさ様々な面からも望ましい姿勢および筆記具の持ち方が重要であることを理解し、子どもたちに伝えていくことが求められる。

第二は日常生活や他の教科との関連の強化である。ただ単に、「しっかりとした姿勢で正しく鉛筆をもって書きましょう」ではなく、なぜ大事なのか、日常生活でどのように役に立つのかなどについてしっかりと価値づけていくことが重要となってくると考えられる。さらに、生涯にわたって美しい字を獲得していくためにも、書写の基礎部分については随所で確認していくことが大切であり、小学校においては書写の授業はもちろんのこと、他の教科学習における「書く」作業においても指導していくことで定着していくと考えられる。なお、文字を書くときの姿勢や筆記具の持ち方に関して、実際には小学校入学前にも学ぶ機会が多々あると思う。小学校での国語や書写だけでなく、家庭でもしっかりと指導していくことで更なる定着が図れると期待できる。

第三は、書写学習への教員の指導力の向上である。教科書だけに依拠した指導でなく、一人ひとりの児童の対応した効果的な指導を具現化するためには、教師自身の指導技術の向上が不可欠である。また単なる技術だけで無く、伝統文化学習として、精神性を高め、伝統文化への

理解を深める有用な手立てとしての意識を教師自身もつことが書写指導の意義を拡充していくと考える。

小学校教員養成を主とする児童教育学科の教員として、高次の指導力をもつ教員養成のため研鑽していくことを自身の課題としたい。

【引用参考文献】

- 1) 若井彌一 (2017) 『必携教職六法』、協同出版株式会社、p.13
- 2) 文化庁 (2003) 「平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」、文化庁
- 3) 木戸久二子 (2012) 「「筆記具の持ち方」の指導について」、東海学院大学短期大学部紀要、38、pp.15-18
- 4) 玉澤友基、湯澤比呂子 (1999) 「書写に対する意識と書写書道教育の課題—「二類書写」・「国語科対象書道実習」履修学生のアンケートをもとに—」、岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要、9、pp.93-112
- 5) 林朝子 (2011) 「小学校における“書写”のあり方：“書写”に対する学生の意識調査から」、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、31、pp.1-5
- 6) 杉崎哲子 (2013) 「書く学習の意義と可能性」、教科開発学論集、1、pp.145-161
- 7) 久米公 (1989) 『書写書道教育要説』、萱原書房、pp.63-66
- 8) 押木秀樹、近藤聖子、橋本愛 (2003) 「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」、書写書道教育研究、17、pp.11-20
- 9) 杓名健一郎、杉崎哲子 (2013) 「書写における姿勢と持ち方による字形の変化」、静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)、44、pp.169-176
- 10) 全国大学書写書道教育学会「若手研究会」プロジェクトサイト、<http://wakate-lab.sho.geo.jp/hp/1-2.shtml> (2016年10月7日閲覧)
- 11) 加藤泰弘 (2015) 「文科省だより (第13回)」、月間「書写書道」、4月号、pp.18-19
- 12) 荒井誠 (2007) 「これからの書写・書道教育の目的と方向性」、卒業研究収録. 書道学科、pp.50-51
- 13) 押木秀樹 (2003) 「「新編書写指導」指導内容編 (押木担当部分)」、全国大学書写書道教育学会、pp.3-5
- 14) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』、東洋館出版社、p.108
- 15) 同上、p.27
- 16) 同上、p.5
- 17) 同上、p.48
- 18) 小竹光夫 (2003) 「伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘」、兵庫教育大学実技教育研究指導センター紀要、17、pp.89-97
- 19) 文部科学省検定済教科書 小学校国語科 (書写) 用
 - 学校図書 (2016)、しよしゃ1ねん
 - 学校図書 (2016)、しよしゃ2年
 - 教育出版 (2016)、「しょうがくしよしゃ1」
 - 教育出版 (2016)、「小学しよしゃ2」
 - 光村図書 (2016)、「しよしゃ1ねん」
 - 光村図書 (2016)、「しよしゃ2年」
 - 三省堂 (2016)、「しょうがくせいのしよしゃ1ねん」
 - 三省堂 (2016)、「小学生のしよしゃ2年」

20) 同上

- 学校図書 (2016)、「書写 3 年」
- 教育出版 (2016)、「小学書写 3」
- 光村図書 (2016)、「書写 3 年」
- 三省堂 (2016)、「小学生の書写 3 年」

(平成29年1月17日受理)